

東北海岸トレイル（仮）構想に関する意見交換会 結果概要

1．目的

東北海岸トレイル(仮)構想の具体化にあたり、実現に向けた課題、トレイルの活用方策、関係者との連携の可能性などについて幅広い関係団体からご意見をいただくべく、開催したものの。

2．実施日時、出席団体

実施日時：平成 24 年 2 月 27 日 14:00～16:00

出席団体：

東京青森県人会、岩手県県人連合会、東京陸中懇談会、在京宮城ふるさと協議会、日本山岳ガイド協会、日本勤労者山岳連盟、NPO法人自然体験活動推進協議会、NPO法人日本エコツーリズム協会、NPO法人日本エコツーリズムセンター、日本フットパス協会、クラブツーリズム株式会社、株式会社ジェーティービー（順不同）

3．意見の概要

（1）ルートの選定について

ルートの選定は、全体構想やソトの視点を入れつつも地元主体で行うべき。地元の人たちが見つけた「地元の魅力」をとりいれたトレイルにする。

これまでの経験に照らすと、いい景観をつないだウォークが、一番幅広い人を引き寄せることができたし、違う季節に再訪するなどの利用もある。そういったみちに、様々な別の要素が絡んでいるのも良い。

住民の生活道路をトレイルのルートにしてしまうと、住民が不快感をもつこともあるので注意してほしい。

地域の実情に合わせて可能な地域からルート選定を行うのは良いが、一方で、検討から取り残される地域がより孤立感を深めてしまわないよう、何らかの手立てを講じられないか。ソフトによるカバーもあり得る。そういった事業では1/2の補助でも活用してもらえる可能性があるのでは。

（2）施設整備について

トイレは一定の間隔（例えば5kmに1箇所等）で必要。ツアー客が一番気にするのもトイレである。

トイレは必要であるが、整備するかどうかも含め、地元任せではどうか。他のトレイルでは、農家や寺社等のトイレを使わせてもらっている例もある。ある程度の利用料を取ってもよいのではないか。

(自然公園全般として)看板が足りていない。道標、植物の生態系に基づく説明看板、眺望の説明看板などのほか、津波の到達場所などに関する標識などが必要である。

道の整備はボランティアを募って行うのがよい。そのほうがトレイルに親しみもわく。

看板などは手作り感あふれているのも、なかなかよい。トレイルを「つくる」楽しみもあると思う。

トレイルの設定や整備にあたっては景観を損なわないよう配慮すべき。トイレを設置する際は、維持管理面も含めしっかり検討してほしい。

車で利用に対応できるよう、駐車場の整備も検討すべき。

トレイルを維持管理するセンターを要所に置くという考え方もある。

(3) ソフト面について

(自然公園全般として)規制が多く、地元がやりたいこともできずにいた。よりよい利用を進める必要がある。

自家用車での利用を考えると、地元と連携して車の回送サービスができるとういのではないか。

絵画展、俳句展などを展開し、動きのある公園管理をすべき。文化的にも価値のある公園を目指すべき。

昼食はお弁当ではなく現地(例えば食堂や港など、地元の人が用意する料理)で食べるのがよい。また、ツアー客には直売所も大変喜ばれる。

地元の食を提供して喜ばれることで地元の女性がやる気になってくると、地元の男性も協力しはじめ、大きな動きにつながる。

- トレイルとエコツアーなどのソフトとの組み合わせが重要。エコツアーなどはリスクマネジメントを含め人材の育成が重要になってくる。
- 海上輸送手段との連携が、多様な利用形態を生む可能性がある。また、ガイドによる語りかけ、会話が、顧客の満足を生むための重要なポイントになる。

完歩証明書などが発行できるとよいのでは。実際に熊野古道では地元が発行している。

トレイル沿いで利用拠点になるような宿泊施設がトレイルについて理解しているか否かは、重要なポイントである。

ツアーを催行する立場からは、客を案内できる地元ガイドがいるととてもよい。区間毎のガイドでもよいが、全線を（何回にも分けて歩きながら）案内できるガイドがいると、客との関係も深まって良い。

○内陸と沿岸域をつなぐ考え方、利用があってもよい。

○滞留する場所、通過する場所のメリハリをつける考え方もある。

トレイルの取組を進めるにあたっては、推進を円滑に進めるための意見集約と調整機能を持つプラットフォーム形成が必要である。

よく街中に「子ども 110 番」の家などがあるが、それと同じように、歩行中に具合が悪くなったときに、ちょっと助けを求めたり休んだりできるような場所が設定されているとよいのではないか。

設備投資よりも人的投資が必要。案内板を整備するより地元の人が「生きた案内板」（＝ガイド）となって案内するほうがよい。

東北は自然学校が少ない地域である。現在、自然学校や自然体験活動の団体を中心に、活動拠点としての場を設立すべく考えているところ。農林水産省や文部科学省とも連携を図っていくべき。

（４）全般

我々の会では「海のアルプス登山道構想」を提唱してきた。このトレイル構想はそれに合致するものである。

地元になんか恩返ししたいという思いはあり、色々取り組んでいる。このトレイル構想は、地元にとって自ら地域活性化に取り組むための気づきを生む機会になると期待している。今回の構想が地元にとって何をもたらすのか、何をしてあげられるのかきちんと伝えられるようになるとうい。

イギリスのフットパスでは、年間 8000 億円の経済効果と 24 万人の雇用がある。多摩丘陵のトレイルでも、マップがよく売れている。この構想も、十分に経済効果を見込める。

ツアーを催行する立場から見ると、このトレイルは大変魅力的で“売れる”と思う。過去には、5泊6日で歩行距離70kmを超えるようなツアーでもお客様は集まっている。

とても魅力的な地域であるが、交通機関等のインフラ整備が十分ではなく、また、パンフレット等の情報が都市圏まで広まっていない。まだ知られていないような良いところもたくさんあるのではないかと。我々もぜひ協力したい。

津波被災地ということで、海外からも結構ハイカーが来るのではないかと。

どのように宣伝していくか、少ないインフラをいかに生かしていくかが重要である。

「滞在型の利用」という視点をコンセプトに入れてほしい。

自転車での利用を進めてはどうか。

自然学校では、リスクマネージャーの育成を計画中。トレイルとも連携できるのでは。その他、このトレイル構想の実現にあたっては、様々な方との連携やネットワークが必要である。我々も協力したい。

鉄道ともよく連携をしてほしい。

仙台から八戸は、車道は繋がっているが鉄道は繋がっておらず、東京などからお客を連れてこようとする際の障壁となっている。このトレイル構想において鉄道の復旧は重要な課題である。

名称は、「海のアλπス登山道 コース」など、地域に根ざした名称としてほしい。また、地域の活性化に資するため、この点は確実に実施してほしい。

このほか、2月中にアウトドア雑誌社や観光協会等の関係者からも個別にヒアリングを行っており、広報・情報発信の重要性やトレイルの維持管理に係る工夫など、幅広く意見をいただいている。